

張頌甲¹⁾

「“歩を進め”でも“形を換えず”——梅蘭芳、旧劇改革を語る」²⁾

張頌甲「“移歩”而不“換形”——梅蘭芳談旧劇改革」(1949年)

天津市民とは長らくご無沙汰であった梅蘭芳³⁾先生が訪問したので、記者は彼に会いにかけつけた。

梅先生は深くグレーのスーツに身を包み、立派な風貌は当時と変わらず、北京で舞台十公演と慈善芝居を一本を続けざまにこなしてきたとはいえ、相変わらず元気そうであった。彼は記者を見つけると、満面に笑みを浮かべながら握手をしてきた。

「もうどのくらい天津の舞台にあがっていないのですか」記者がたずねると、

「十四、五年になるでしょうか」と感慨深げに彼は答えた。

梅先生はまず、中国人民政治協商会議⁴⁾への参加から語り始めた。政治協商会議に参加できたことに彼は非常に感激しているようだ。「これは有史以来の人民の大団結であり、各党派、各民族、各団体の代表が親しく結束し、誰もが自由に意見を表明することができました。これぞまさしく民主的なやり方というものです」と彼は語った。

しだいに話題は旧式の役者の改造と旧劇改革という二つの問題に移り、梅先生は本業についての話になるや、さらに悠然と「おしゃべり」を繰り返した。

彼は、時代が変わり、社会も変わったのだから、旧式の役者が改造を必要とすることは問題ではない、いかなる人も進歩しなければ必ずや落伍してしまうだろう、と

考えている。解放後、人民政府は強力に役者たちの改造を支援してきた。これは非常に賢明な措置であり、それが極めて困難な仕事であったとしても、大多数の役者はこれによって新しい道を歩み始めた。この点について彼は非常に嬉しそうであった。

内心の嬉しさが彼の表情に浮かんでいる。

「もちろん旧劇改革は容易なことではありません！」と彼は語る。「しかし今日において演劇を如何に人民のために奉仕させるのか、これもまた至急に解決しなければならない問題です。私が思うに、京劇の思想改革と技術改革はできれば混同して語るべきではなく、後者は原則として残していくべきで、前者もじゅうぶんな準備と慎重な検討を経るべきであり、それから修正してはじめて、誤りを発生させずにすむでしょう。京劇は古典芸術であり、数千年の伝統をもっているのだから、我々は修正するにしてもより慎重にあたる必要があり、変えるなら天衣無縫の完璧なかたちに変えて、その痕跡をまったくわからないようにしなければなりません。そうでなければ、必ずやぎこちなく、無理があるものになってしまいます。そうすると、それが得る効果もずっと小さくなるでしょう。俗に“歩を進めれば形も換わる”⁵⁾と言いますが、今日の演劇改革工作は“歩を進め”でも“形は換えず”というふうにしなければなりません」

彼はソ連の文化・科学・芸術代表団団長シーモノフ⁶⁾

1) [訳註] (1927-) 河北省石家荘の人。ジャーナリスト。建国後、『進歩日報』、『大公報』、『北京日報』、『中国財貿報』などに所属。1983年、『経済日報』副総編集長、1986年、『中国建材報』社長兼総編集長。現在は中国建材報社名誉社長。

2) [訳註] 初出は、1949年11月3日『進歩日報』。訳出にあたっては、以下を用いた。翁思再主編『京劇叢談百年録（増訂本）』、中華書局、[1999年]、2011年、274-275頁。なお、『京劇叢談百年録（増訂本）』には本テキストのタイトルに編者による注があり、内容は以下の通りである。「本文は1949年11月3日天津『進歩日報』に掲載されたものであり、文末には梅蘭芳直筆の署名が付され、発表後大きな反響を呼んだ。北京の著名な文化官僚や評論家は“移歩不換形”の観点に同意せず、一連の文章を書いて梅蘭芳に対する攻撃を準備した。中央指導部（一説には中央宣伝部の陸定一）はこの事実を掴むと、梅蘭芳の影響は大きく、批判も慎重に行うべきと考え、関連資料を中国共産党天津市委員会に送り、適切に処理するように委ねた。11月27日、天津戲劇家協会は錢杏邨（阿英）を司会として座談会を開き、梅蘭芳に自己批判をさせ、“移歩不換形”を“移歩必然換形”と変えさせた。ここでやっとこの顛末は終息し、天津に長期逗留していた梅蘭芳は上海に戻ることができた。しかしながら、梅蘭芳はその後もさまざまな形で“移歩不換形”の思想を表明した」。

3) (1894-1961) 原籍江蘇省泰州の人。北京生まれ。代々の京劇役者の家に育った京劇の女形。四大名旦の一人。梅派創始者。1915年に古装戯を創始して以来、京劇界のトップに立つ。31年、国劇学会を組織。日本、アメリカ、ソ連で海外公演を行う。建国後は、中国戯曲研究院院長、中国京劇院院長等を歴任。代表作に『太真外伝』、『霸王別姫』など。

4) [訳註] 中国の民主諸党派などで構成され共産党統治を補完する人民民主統一戦線組織。

5) [訳註] 「移歩不換形」。歩を進めれば風景もそれに従い変化することを表す成語「移歩換形」を梅蘭芳が「歩を進めても形は換えず」と言い換えたもの。この主張が戯曲改革に消極的であると批判されることになる。

6) [訳註] (1915-1979) Konstantin Mikhailovich Simonov ロシア（ソ連）の小説家、劇作家、詩人。作家同盟書記として党の文芸政策を推進した。従軍記者体験に基づく戦争文学に優れる。代表作に、小説『夜となく昼となく』、劇作『ロシアの人々』など。

氏の話を例にさらに補足した。「シーモノフ氏は私にこう言ったことがあります。中国の京劇とは一種の総合的な芸術で、歌唱と舞踊が一体となっており、外国にはあまりないものである。だからこそ京劇が古装劇であるからには、その形式は変え過ぎないほうがよい。とりわけ技術については全く変えることができない、と」そこで彼の確信はますます強くなったのである。

彼は記者に京劇改革工作は彼がこれまでずっと尽力してきたことであり、場面、音楽、プロットにかかわらず、随時修正を加えてきたと語った。例えば「蘇三起解」⁷⁾の護送役人崇公道⁸⁾をじゅうぶんによい人物とは表現しないが彼の同情心は強調したり、「宇宙鋒」⁹⁾における趙忠¹⁰⁾の自刃を誤って殺されたことにしたり、「霸王別姫」¹¹⁾で楚歌の効果をやや低減するなど、すべて初歩的な改変であり、まだ満足できるものではない。

彼はまた京劇界の連帯もまだ十分ではなく、団体間の繋がりが少ないことも認めている。このため、今後はさらに連携を強化し、互いに励まし合わなければならない。旧劇における「蹀躞」〔纏足を履いている女性を演じるための靴を履き脚の指二本だけで演じること〕や「武把子」〔いわゆる立ち回りを担当する役者のこと〕のような厳しい修行については、多くの時間を割くべきかどうか現在検討しているという。これらの問題はいつも彼の念頭にあるのである。

夕陽がひとすじガラスの窓越しに射し込み、室内の菊の花は満開である。雰囲気は和やかで温かみがあり、このとき梅先生もさらに光彩を放っていた。

「では梅先生は新戯をどのように編むべきだとお考えでしょうか」記者はさらにこの問題について問いかけた。

「新戯の創作も当然拙速にはしてはいけないものです！」彼は興味深げに言った。「例えば、創作過程で最初にすることは材料の収集です。これは歴史全体の中で大衆が喜びそうな精華を選ばなければなりません。二番目には、内容を審査し、集めた材料に正確な批判を加えなければなりません。その不健全な部分は除き、積極的な意義を発揚するということです。そして三番目は、純粋に技術上の作業です。これにはいわゆる“玄人”にやってもらいます。例えば物語のエピソードや場面の組み立てなどです。以上の三つの段階には、多くの文学芸術工作者がまず分担して作業したあとに協力し合うということが必要です。互いにうまく協力できさえすれば、多くのよい新戯を生みだすことができると思っています」これが梅先生の新戯創作についての主張である。

彼は記者に語った。ひとりの役者を養成することは容易なことではない。今後彼は頻繁に上演を行い、できるかぎり同業者や友人たちと議論し、検討することで不断に進歩を図っていきたい。今回彼は天津で十日間舞台に出演する予定であり、その後は上海へと移動してまた上演を行うという。

最後に彼はまた興奮気味に記者に、来年彼はまたソ連を訪問し交流や学習を行い、併せて中国の民族芸術を外国の友人に紹介するかもしれない、と語った。

梅先生との会話は終始親しみやすく和やかな雰囲気の中で行われ、知らないうちに壁の時計が四度も鳴っていた。記者はもう暇を告げなければならない。なぜなら四時間後には彼は舞台に上がり観客と対面しなければならないからである。

(訳：三須祐介)

7) [訳註] 京劇。明代、吏部尚書の子息と恋仲になった名妓の蘇三が濡れ衣で死罪となるが、身の潔白を訴え、遂に疑いが晴れるという物語。

8) [訳註] 「蘇三起解」の劇中人物。蘇三を護送する役人。

9) [訳註] 京劇。秦朝二世皇帝胡亥に取り入る奸臣趙高の娘艷容は、父親に嫁ぎ先の匡家を断絶させられ、皇帝の妾とされるも、狂気を装い抵抗するという物語。

10) [訳註] 「宇宙鋒」の劇中人物。匡忠の誤記か。匡忠は艷容の夫。

11) [訳註] 京劇。四面楚歌に陥った項羽の前で、虞姫が王の心を察し剣舞を装いつつ自刃するという物語。